



* 葉樹會報 *

通卷第十九號

鷹野君の思出

近藤

鷹野君が中支の戦線で名譽の戦死を遂げられたと云ふ手紙が望月君から來た。鷹野君からは戦地から一二回葉書を貰つたし私も返事を出した様に思つて居るがどんな事を書いたか忘れてしまつた。

それで今改めて鷹野君がどんな事を書いて來たか見直そうと思つて机の引出し全部出して探し出しきて見たが見當らない。會社の机の中に入つて居るのかも知れないが是非探し出し度い。僕の現在の氣持はどうしても鷹野君が既に此の世から去られて英靈となられて居るゝ云ふ氣になれない事である。矢張り何處かの戦線での圓の顔をして元氣で過して居る様に思ふ。鷹野君の思出と書いたが、何時頃から鷹野君を知る様になつたか生來の無頓着の僕には覚えて居ない。只僕が學校を出て大分たつてから國立の部室でスキ焼の會があつた時に、いやにゴロゴロに肥つた學生が居るこ思つて聞いた處、あれは鷹野と云つて山岳部切つてのエキスパートであり仲々の人氣者であると云ふ事が分つた。何んでも小谷部君とよく組んで北岳の冬期登攀等盛んにやつて居た事を覚えて居る。それで専門部卒業の時是非本科に入學する様奨めたのだが、家庭の事情でもあつたかそのまゝ卒業して日本郵船會社に入社してしまつた。

鷹野君の性格等に就いては一橋山岳部並に針葉樹會員諸賢の方がよく知つて居て、むしろ僕なんかは知らない方の部類に屬するかも知れないが、あんな無邪氣な可愛らしい而も元氣な感じを僕に持たした人も珍らしい。鷹野君とは山行を共にしたのは白馬岳へスキーで行つた時丈だつたと思

ふ。あの時君の足の太いのに驚いた。實に君の足は短かくて太い。あれでこそ難所中の難所と云はれる北岳ペツトレスも踏み越え得たものとつくづく感じた事を思ひ出される。

要するに毎月開かれる針葉樹會で君の顔を見て居たが共にゆつくり話合つた事が無い様に思ふ。或は一度位はあつたかも知れないが、煤煙渦巻く大車田に來て早や三年、東京の事が段々霞の様にボツとして來て田舎者になりつゝある現在である、情けないが致し方ない。

只々若く頼もしい好漢鷹野君が英靈となつて内地に凱旋されるさ云ふ悲しくも壯嚴な現實に對し、我々針葉樹會員並に一橋山岳部員は良く反省す可き點はお互に反省して愈々確固たる團結を以つて山岳部本來の使命に邁進したいものである。

愛書記

増山清太郎

一、六月

傳え聞く、熊さんがさる古本市で、ヘデインの「アジア横斷」英譯を見つけた。彼氏にとつては垂涎萬丈ものだが、如何せん値段が六十圓とか六十五圓とかで、流石の彼氏も涙を呑んで引上げてしまつた。

それと前後して私の書齋には、遠く戰亂の英國から件の書物が届けられた。値段は八圓程である。この二卷の大冊を手にして、喜ぶ筈の私が逆に憤慨してしまつた。さいふのは、邦譯本（富山房百科文庫四八、岩村忍譯「中央亞細亞探検記」英譯よりの重譯にして抄譯）が實に亂暴極りない誤譯の連續であることを知つて

大いに怒つたのである。興味につられて一氣に読み通した諸君はもう一度静かに読み直してみると、辻棲の合はない記述を幾つか見出すだろう、その盡くが、恐るべき誤譯である。附錄の著書目録も隨分怪しいものだ。私は瑞典語には勿論歯が立たないが、せて英譯を手にして、ヘデインに對してよい事をしたと思つてゐる。

翻譯のひどさもさる事ながら、タクラマカン沙漠で危い命を助つてから後、アクスウ迄の紀行の略されてゐるのも惜しい。特にアクスウで、死の砂漠から逃れ出た唯一頭の駱駝が、過労にさいなまれて遂に死んで行く場面など幾度か讀返した。折しも回教の祭日で、人々は一切の仕事を休み、派手やかに着飾つて町を賑はしてゐるところ、著者と生死を共にし貴重な記録類を助けた白駱駝は、靜かに後生を祈られる。もう一頭の駱駝（これは沙漠横断の後に買入れた）は翌日バザーに賣りに出す筈であつたが、流石にヘデインは愛惜の情にしおびず、世話になつた商人に贈つて一夏の休養を攝らせるこゝし、再び馬を馳つてカシュガルへと去つて行くのである。

二、七月

過日某新聞の學藝欄に、洋書饑饉とその對策に就て、諸名家の意見が發表された。その中の高橋誠一郎教授の説によると、當分の間歐洲から書物を購入することは出來ないのであるとの事である。無いと言はれる急に欲しくなるのは人情で、私も今の中に入つて行くのである。

W. M. Conway-Climbing and Exploration in the Karakoram-

Himalayas, with Scientific Reports, EDITION-DE LUXE

(Limited edition of 150 copies, signed by the author)

これには、アーヴィングの書いた挿絵の主なものを、日本産絹布に特刷した複製がついてゐるやうだ。

J. D. Hooker-Life and Letters of, based on materials collected and arranged by Hooker.

こんな本の存在を知つてゐる人は少いだろう。

F. E. Younghusband-The Heart of a Continent, a Narrative of Travels through Mongolia, across the Gobi Desert, through the Himalayas, and Pamir and Chitral.

俗な本を1冊入れた方がいい。

Thomas Thomson-Travels in the Western Himalayas and Tibet. 1847-48.

著者はフックナーの竹馬の友、醫師として教育を受け、しかも植物學者として、探検家として名を成した點でフックナーによく似てる。本書は彼が東印度會社に在職中、チャウト・カシミル國境裁定委員の一人として未知の地方を旅した紀行である。

H. G. Ponting-Great White South, or with Scott in the Antarctic.

著者は著名な寫眞家、彼の手になる富士山寫眞集は、寫眞の數こそ少いが、非常な傑作である。この本も寫眞を中心としたものだそうである。

英國に關する限り、山の本は今が買ひ時だと思ふ。開戦以來、値段は暴落したし、出物は多いし、磅貨は廉いのだ。然し歐洲の事態は一刻も悪くなつて、高橋教授の言はれる書物を買へない状

態に近づいてゐるゝかの事實だ。現在すでにフランスへは送金の方法が無いし、獨伊では本年中に平和來を信じて、開店休業状態に甘んじてゐるらしい。遅ればせに註文した山の本、果して機雷原を縫ひ、二つの海を渡つて、私の手許まで來るかしらん。この原稿が活字になる頃には、こんなことは、もう夢になつてゐるかも知れない。ヒットラーよ、あそ一月待つてはくれないか！

三、八月

神田を歩みついでいたら、前記「アジア横断」の原著 En Färd genom Asien 1893-97 の上巻を見出した。どうしりした英譯本に比べて、原著は何を、お伽話の本みたいだ。色刷の表紙は砂漠を渡る駱駝の旅を書いてゐる。バラ／＼とめくつてみると、内容もいくらか英譯とは違ふらしい。英譯の最大の缺點は、全行程の中極く少部分しか地図がついてゐないことだが、原著にはアジア全圖に著者の行路を赤で示したものが載つてゐるのである。なほ、原著はスコーデン・ノルウェー王オスカーア世に公献せられ、英譯はプリンスオブウェールズに公献されてゐる。

四、九月

John Tyndall-Hours of Exercise in the Alps は私の書架に收つた最初の横文字の山の本であり、かつ國外から直接取寄せた最初のものである。數年前矢島祐利といふ人が翻譯して岩波文庫の一冊（一〇一九一三〇）として世に出た處、松方三郎氏あたりに大分叩かれたやうだつた。それがあらぬか、新に改譯版が出た（同文庫二三五六一九）ので手に取つてみる。

舊版に序文が略してあるのは、甚だするいやうであつた。流

石に改譯版には、あの飛躍の多い、難解な序文を譲りしてゐるが、譯文が奇妙である。私は次のやうに譯してみた。

暫く前に、私は「断片」の書を公にした。それは「屋根裏と實驗室に於ける修練の時間」とも呼ばるべきものであるが、本書は「アルプスに於ける修練の時間」といふ標題を持つてゐる。この二冊の書物は相補ふものであり、相俟つて自然の知識と自然の景観を愛する者が、その生活を自己の好む所に没入して行く様相を書いてゐる。

著述は、何と楽しいものではないか、私はアルプスに於ける日と時とを、單獨登攀によつて満たして行くことが出来たとは思つてゐない……。

譯文甚だ不如意であるが、後段の所は、登山に缺如し勝ちな獨りを楽しむ境地を、著述の中に見出した事を述べてゐるものゝやうである。

こゝまで書いてきた時、机上に一枚の葉書が投込まれた。「御註文のコンウェイは賣却済で、お送り出来ないのは甚だ遺憾である。次回御註文の品は御手に入ることを期待して止まない。」そしてこんな簡単な葉書に「檢閱済」の物々しい印が捺してある。

残念だが無理もない。コンウェイの名著、しかも地上に百五十部以上は存在し得ない豪華版が、熊さんの買ひ損ねた本の半分にも足らない値で賣りに出てゐるのだもの、いかに戰國時代とはいへ、極東の貧書生の註文より先に賣れてしまふのは當然だ。

私は從來、限定版や初版ものを愛玩する態度を蔑視してゐた。書物を愛する者は、内容の同一である限り、廉價なもの、讀みい

ト版を買ふがよく、多數の版のあるものは決定版を尊しさし舊版は決定版との關聯に於てのみ價值がある。この意味で私は近頃よく出る小島烏水の愛藏版などは買はないし、木暮理太郎の紺飛白に至つては菓子折みたいで、厭惡の情さへ抱いてゐる。私の書架にある「日本アルプス」の小島烏水から高野鷹藏への献呈本や雑誌「博物之友」(揃)の梅澤親光手澤本などは、いはゞ偶然に、普通の値段で買入れたもので、決して覗つて買つたものでない。豪華版を愛する氣持は骨董品を蒐集する態度を以て律すべく、初版を尊む心理は、初摺と後摺とで必然的に藝術的學術的價值の異なる美術品と、内容を尊むべき書物とを混同してゐるのだと思ふ。かくて、私は書物と骨董とを混同することないやう、自ら固く誠めてゐたのである。

處が何のはすみか、理屈なしにコンウェイの豪華版を註文してしまつたのだが、いまこの断り狀を見て、冷水三斗の思がある。そうだ、豪華版なんか買ふのは物好きにすぎない。コンウェイなら、從來から日本にゐたつて讀めた。それより、私が一番待つてゐるのはフツカーの傳記なのだ。フツカーが手に入らなかつた時こそ、地團太ふんで口惜しがらう。

賣れてしまつたコンウェイの代價で別の本を註文することにした。まづ行掛り上コンウェイの普通の版を買はう。フツカー傳を讀むには彼の著 Himalayan Journals があつた方がいゝだろう。その他になほヤンクハズベンドの India and Tibet を入れる餘裕さへある。これはヘースチングス以來の兩國の交渉史だ。

これから、註文の葉書を出しに行く。再び「ヒットラーよ、二

ヶ月待つて呉れ」と念じながら。

九月十五日記

林俊介君新家庭訪問記

神主

凡ちやんが結婚した。

昭和十五年の十一月九日、上野の精養軒で御披露の宴があり、早速新家庭を持たれたのである。新夫人の御名前は晴子さんである。つまり雨男が晴子さんと結婚された譯である。

針葉樹會の不文法として、新家庭訪問のことは鐵則であり、訪問記一文を草して恭しく會報に所載せねばならぬ。この役割は同僚たる我輩の履行すべき大任である。そこで十一月廿日の夜、望月千瓢氏の援助を得て、現役大勢と共に澁谷の里は北谷町に押しかけた。

書齋に案内されて凡ちやんを中心に入れこれの話が出る。奥秩父の黒岩尾根と富士の寫眞が懸けてあり、凡ちやんはこれから新夫人と共に山を愛する心組みだ。

やがて新妻晴子さんが、御茶をたて、御持參に及ぶ。さてこそ絹すれの音もかそかにて扉打開けて現れたり——と言ふ場面である。凡ちやんは何としても新夫人を吾等一同に紹介する責任がある筈だ。押しかけた面々は、この女性こそ凡ちやんの新妻殿と感じたものゝ、こちらから切り出す譯にもゆかずにあるのに、凡ちやんは凡ちやんで何とも言はない。耐り兼ねてこちらから、

—— オイ、何さか言へよ

—— ウ・ン。

—— 初対面の連中だ。紹介して呉れなれどや判らないよ。

—— それだけ言つて呉れればもう判つた筈だぜ。
と言ふ様な次第で、お互ひにどうぞ宜敷くと初対面の挨拶が済んでしまつた。

御茶をすゝり茶菓子を食べる。言ひ合した様に鷺野君の話が出た。新婚早々の家で故人の話でもあるまいが——と言ふ譯にはゆかぬ。彼もあの世で凡ちやんの御芽出度を、きっと喜んでゐるに相異ない。東京に居ればどうせ今夜の一員だつた筈だ。やがて御母堂と新夫人御揃ひで書齋に來られ、夕食の準備が出来たからどうぞ——と言はれるまゝに、別室で一同心からの御饗應を受ける。御母堂と新夫人の手厚いもてなしには誠に恐縮の外はない。

一同の顔がボカ／＼と赤くなる。御酒が段々と利いて來た。スキ焼の香がブン／＼する。凡ちやんと千ちやんと僕の三人で何時かコンちやんの御宅に伺つた夜のことを想ひ出した。さて肉不足の此の御時勢に、豪勢な肉にありついた一同、このところカロリーの補充に大忙である。そのうち山の話が始つた。千ちやんは鼻の頭に汗かいて山の話に夢中になる。兵站部の新夫人は忙しい。凡ちやんは相變らず酒に強くて平氣であるたが、そのうちに——もうこれからは僕が山に登つても雨は降らない。

—— そんなことはない。君は針葉樹會の名物だ。
—— イヤ、もう降らない。斷然雨なんか降るものか！
と言ふ次第です。親戚の様に親しかつた雨に對して、「雨なんか

と言ふ輕蔑の辭を與える次第です。さてその理由はと聞くと、

——アレが晴子と言ふ名前だらう。だからもう降る譯がないよ。

と言ふのでこれには一同ダーコなつてしまふ。

さて腹一杯の御馳走に赤い顔した一同が再び書齋に戻り、十一時過迄雑談した。歸途凡ちやん夫妻は御揃で途中迎送つて呉れた。亂れ雲飛ぶ空の眞中に、寒月は皎々と輝つてゐる。どうも凡ちやんは晴男に轉身したらしい雲行きである。

記録（昭和十五年四月以降）

富士の四月 中川孫一、増山清太郎、望月達夫

四月末の連休に久々で富士へ行つた。増山は二十七日夕刻先發して、同日は馬返し泊り、二十八日五合目の佐重の小屋へ。中川

望月は二十八日朝發。晝頃馬返に着くと、程なく雲交りの雨が降り出し、登る程に躊躇して雪に化つた。二時間程も降つて上方では一寸位は積つた。五合目の小屋では佐重相變らず健在。頸のコブは大分大きくなつたやうだ。午後佐重の小屋の上方のトタン張りの小屋に這入つてゐた山田以下の張切つた現役連中と話しこみ。そこで増山と合流。

二十九日快晴に恵まれ、四時半發、六合目でアイゼンをつけ、強風の中を八合目に達したのは八時五十分。あそから登つてきた山田と佐藤は頂上へ、吾々三人はそこから下つた。途中食事をしたりしてゆつくり下り、吉田驛まで現役連中と一緒に歩いて下りる。

桜野は富士櫻が満開で、純白の富岳を背景にしたその眺めは、

洵に長閑な、しかも清らかに美しいものであつた。

九鬼山

望月達夫、他五名

六月九日 晴一時曇

田野倉（一〇、〇〇）—札金温泉（一〇、四五）—札金峠（一一、一〇）—九鬼山（一二、〇〇、一二、四〇）—朝日小澤（一、二〇）—猿橋（二、三〇）

雨に降られた四月の思ひ出も懐しい田野倉に下りて札金峠へ登る。峠はつまらない處。九鬼山の頂はとり立てゝ云ふ程のものではないが、低い割りに見晴しがいゝ。御正體山が中々立派だ。朝日川水源の山々には緑が重なり合つてすつかり夏の装ひである。

御正體山 中川孫一

六月十六日

谷村から表参道を登つた。道志川奥の山々はすばらしい森林に山頂まで蔽ひつゝまれてゐて天城山を思はせる。峯宮附近のぶなの原生林は實に美事だ。紅葉の頃が偲ばれる。一等三角點ながら灌木にひしくと取囲まれた上夏霞たちこめて眺望皆無。降路を裏参道東桂口にさる。此側も陽も通さぬ密林、グラミ澤源頭の緑は實に深い。鹿留川沿の道は愉しい。登山大衆から見離された此山は幽邃閑雅、都塵を洗ふにふさはしい。

芝倉澤ゾンメル行 小柳二郎

六月九日

ゾンメルを一ノ倉寄りの稜線まで背負ひ上げたが、雨には降られし雷様には威かされるし、早々に引返した。歸りに寄つた成蹊のヒュッテは人も建物も仲々に好感が持てる。

八ヶ岳行

小柳二郎外一名

七月二十八、九日

會社の同僚がどこか行き度いと云ふので足馴しさ山岳展望を目的に、朝東京を出て、本澤へ一泊、硫黃から赤岳まで縦走して清里へ下つた。午前中數時間は快晴に恵まれて、視界は頗る廣く、申分のない中部山岳の展望臺であつた。草鞋で通したが、清里まで二里半のトロ道には全くうんざりさせられた。

富士山 中川孫一

七月二十六、七日 吉田口—御殿場口

紀元二千六百年を紀念し妻、長男(十歳)長女(九歳)支店長、同僚及其娘(十三歳)息子(十三歳)女事務員總勢十一名といふ多彩な顔觸、隊長たるもの大に心配したが、案するより産むが易し、子供部隊は常に成人組をリードし登頂一番乗り、晴天だつたが但二十米位の突風と雲とに禍され、剣ヶ峯の大觀は無かつた。御殿場口より下山となるや子供部隊は砂走りを飛魚の如く快走し元氣溌溼、太郎坊—御殿場間の輸送力極貧、待機一時間半にして辛ふじて乗車、平日にして斯の如し。

本年の登山者數は超記録にして、之に伴ひ登山道、小屋の汚穢言語に絶す。

奥又白谷、前穂高 小谷部全助、船本文治

七、二六 島々—上高地天幕

七、二七 雨、上高地(七、三〇)—徳澤(九、〇〇—一、三〇)—奥又

白ルンセ下幕營(三〇〇)

七、二八 晴後壘 ルンセ下(八、三〇)—奥又白池幕營(一二、〇〇)

七、二九 快晴 天幕發(七、二〇)—四峰フェース取付(八、三〇—五〇)—樋の下のテラス(九、四〇—一〇、一〇)—樋下(一〇、四〇)

樋上(一一、〇〇)—四峰上(一二、二〇—三〇)—北尾根—前穂頂上(一、四〇—二、〇〇)

七、三〇 快晴 天幕撤收(一〇、三〇)—ルンセ下(一、四〇—二、〇〇)徳澤(二、〇〇—四、〇〇)—上高地(六、〇〇)

七、三一 島々より歸阪。

天氣は初だけ一寸悪かつたが精進の好いせいか例によつて歸るに惜しい快晴續きをとらへて岩登りは快適だつた。OB二人丈なのに六人用ウインバー天幕一式や食糧等ゴタ／＼持込んだ爲に六七貫の重荷で例のルンセを登る仕儀とは相成つたが案外元氣で昔通りに頑張れた事は自分として何より嬉しかつた。

かつて奥又白も隨分訪れたものだが矢張り何時來ても良い。機会と體が許せば冬の登攀も亦是非實行し度い等々と張切つて來るが勧め持つ身のまゝならず、今度も惜しい所で引揚げた様な譯である。

針葉樹會例會 六月二十日(木)於如水會館

出席者(會員)中川、村尾、高橋、高見、増山、丸茂、堀岡、小柳、望月(部員)大塚、日江井、宮城、根本、久保、佐藤、山田、清水

上京中の堀岡氏を迎ふ。現役より夏山計畫の發表あり。偶々九時半頃大雷雨と共に、大藏省の火災を見物した。

針葉樹會例會 七月廿四日(水)於如水會館

出席者 中川、渡邊、吉澤、村尾、高橋、吉澤(松)、高見、増山、清水

友田君遭難に關し部員より詳細なる報告を聞き後先輩より意見を述べ。

針葉樹會例會 八月廿三日（金）於 如水會館

出席者（會員）吉澤、村尾、増山、小柳、柿原、林、望月

（部員）岩崎、宮城

今夏の遭難原因並びに爾後の部員の行動等に就き鋭い検討を行ふ。

臨時針葉樹會 十月七日（月）於 如水會館

出席者（會員）中川、渡邊、吉澤、村尾、手塚、山口、太田、高見、増

山、鈴木、小柳、柿原、望月（部員）岩崎、日江井

臨時針葉樹會 十月九日（水）於 一橋講堂會議室

出席者（會員）中川、渡邊、吉澤、村尾、高橋、山口、太田、高見、増

山、鈴木、小柳、柿原、望月（部員）岩崎、大塚、日江井、宮城、深谷

山田、根本

此の二回に亘る會合に於て、山岳部の今夏の遭難を契機として問題化した諸々の問題に關し、先輩現役共充分討論を重ね、ほゞ解決點に達せり。

臨時針葉樹會 十月廿六日（土）於 如水會館

出席者（會員）堀岡、小柳、柿原、望月、部員九名出席

遠來の堀岡君を迎へる會合としては、申譯ない迄に淋しい集りであつた。

針葉樹會例會 十一月四日（月）於 如水會館

出席者（會員）中川、吉澤、高橋、久保田、鈴木、増山、小柳、柿原、林

望月（部員）大塚、日江井、岩崎、佐藤（政）、根本、川村、古澤、清

水、佐野、鈴木、高野、佐藤（眞）

中川、柿原兩氏常盤部長訪問の結果を説明、學生と部長との會合の結果も聞き、夏以來の問題は今日を以て一應解決とせり。尙本月十七日の友田君追悼會の件につき相談せり。

消息

山口 稔一君（勤務先變更）芝浦工作機械株式會社營業部（横濱市鶴見區末廣町二ノ四、電話鶴見四四九五一四四九七番）

打橋 壽郎君（住所變更）鎌倉市腰越二四九番地

吉澤松次郎君（住所變更）中野區野方町二丁目一四八〇番地

渡邊 九郎君（轉任）三菱銀行板橋支店（板橋區板橋町六ノ七六七（住所）神奈川縣大船町田園三一六ノ七五

高瀬 進三君（應召）歩兵少尉として六月十一日左記部隊へ入

隊せらる。

近衛歩兵第三聯隊第二中隊

中島 孜君（住所變更）西宮市外甲風園住宅地一號地一七

（阪急西宮北口下車）

小谷部全助君（住所變更）兵庫縣阪急線西宮北口武庫莊内

堀岡 清君（轉任）三井物產本社參事附

（新住所）中野區中野驛前十四番地、中野莊内

鷲崎雄四郎君（勤務先變更）日本肥科株式會社（丸ノ内五一三一（住所）市外武藏野町西窪二九六番地

磯野 計藏君（新住所）麻布區廣尾町三五（三田二六一四）へ轉居

森 健二君（新住所）西宮市南郷町七六へ轉居